



(財)沖縄観光コンベンションビューロー
会長 松本 行雄

沖縄観光の現状について

沖縄県は、我が国唯一の亜熱帯地域として特有の自然景観と近隣諸国との長い交流の歴史によって育まれた独特の文化を資源に、国内においても有数の観光・リゾート地として発展してきた。

本県の観光は、復帰前は戦跡観光地として慰霊訪問団を中心とした観光が主流で、復帰の年には年間約四十万人の観光客が訪れた。昭和五十年の沖縄国際海洋博覧会開催を

その後、航空会社による青い海、青い空のイメージを打ち出した沖縄キャンペーンの実施、民間投資による海浜リゾート施設の整備などにより、観光・リゾート地沖縄のイメージアップも図られ、また、修学旅行や家族旅行の順調な伸びやプロ野球のキャンプ地としての沖縄が注目され、入域観光客数は着実な進展をみせ、平成三年には三百万人の大台を突破した。

契機に道路、港湾、空港等の社会基盤が国によって整備され、この年の観光客は百五十万人へと大幅に増加した。

そして、平成十二年における我が国初のサミット首脳会合の地方開催、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の世界遺産登録がなされ、リゾート地沖縄が世界各国へ情報発信された。また、平成十三年には、NHK連続テレビ小説「ちゅらさん」など沖縄を舞台にしたテレビ放映の影響により全国的に本県に対する関心が高まり、入域観光客は順調な伸びをみせた。

しかしながら、同年九月にアメリカで起こった同時多発テロ事件の影響を受け、修学旅行を中心としたキャンセルが相次ぎ、結果としてこの年の入域観光客は前年を下回ったが、その後、官民一体となった取組みにより同時多発テロ事件による影響を最小限に留めることができた。そして、平成十五年には、過去最高の五百八万人を記録し入域観光客数も順調に推移しており、沖縄県では平成十六年の目標入域観光客数を五百二十五万人に設定し、七月現在目標を上回るペースで極めて順調に推移している。

一方、沖縄観光の持続的発展に向けて解決しなければならぬ課題もある。昨年度、沖縄県で実施した「二〇〇三年度沖縄観光客満足度調査」によると、全体的な沖縄観光に対する満足度は年々高まっているものの、もてなしや接客マナー及び地元の観光への関心や交通マナーについては前回の調査に比べ満足度が低下しているほか、観光情報及び食事の面では満足度が低い

という結果が出ており、改善の余地も残されている。これらの満足度調査の結果やリピーター率が六割を越え観光客のニーズが多様化し、消費単価が低下している現状を踏まえると、沖縄観光の更なる質の向上のため受入体制のさらなる強化や新たな沖縄観光の魅力づくりが現下の課題であると考える。

このような中で、国の支援を受け沖縄県及び財団法人沖縄観光コンベンションビューローにおいて実施している沖縄離島地域観光活性化推進事業、観光産業人材育成事業、沖縄観光共通プラットフォーム構築事業については、これらの課題解決に向けて適宜を得たものであると考えており、沖縄観光の推進母体として国、沖縄県はもとより観光業界と連携し官民一体となった取組みにより、沖縄県観光振興基本計画の目標である平成二十三年における入域観光客数六百万人の達成を目指し沖縄観光の発展に鋭意努力していく所存である。